

黒田24騎小傳(8)

後藤 又兵衛基次

生没年 : 1560~1615年  
位置付 : 大譜代(八虎の一人)  
禄高 : 1万6千石  
別名 : 政次、政親、左衛門丞、隠岐守

戦国争乱の中にあつて、「天下の豪傑」と讃えられた武将が黒田家藩中に二人いた。その一人が、後藤又兵衛基次である。

播磨の国山田村に生まれる。父は、御着城主小寺政職に仕えていたが、早くに病死したため、同じ政職の家臣であつた黒田官兵衛に養育された。

初陣は、讃岐高松城の合戦。その後は、官兵衛に従つて、中国大返しの山崎の合戦、島津を追撃した九州平定等で活躍、その後、中津13万3千石の城主となつた官兵衛に従つて中津に行く。

城井谷騒動、豊臣秀吉が朝鮮へ出兵した文禄・慶長の役等、戦国争乱の流れの中で、黒田官兵衛と苦楽を共にし、華々しい活躍で頭角を現した。

官兵衛は、中津城にて隠居をし如水と名乗る。又兵衛は、藩主となつた長政に従つて関ヶ原の戦いで活躍した。1600年、長政の筑前入国時には、豊前との国境に近い、六端城の一つである、現嘉麻市の大隈城(益富城)の城代に任命され、1万6千石を拝領する。

しかし、又兵衛並びに家臣群は、大隈城が戦略的に重要な城であることに間違いはないが、関ヶ原の軍功にしては、山間僻地へ押し込められた様な気がしていたし、長政も又兵衛を目の上のコブと感じるようになっていった。知行のことだけでなく、官兵衛から長政への藩主継承のヒズミが、様々な不満を招き、1606年、又兵衛は家財もそのまま脱藩した。

筑前入国の6年後、如水の死の2年後のことである。

両者の不仲や脱藩に関しては、黒田家譜や松浦藩の武功雑記(巻4)、「播磨鑑」等に記載がある。また、綿谷雪氏がその著「実録 後藤又兵衛」(中公文庫)に詳しく書いておられる。

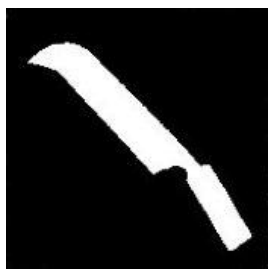
脱藩後、浪人となつて故郷の播磨に帰っていたが、1614年、豊臣方の挙兵に応じて大阪城に入城、武将として迎えられる。又兵衛の戦い振りはすざましかつたが、所詮寄り合い兵団で軍略もバラバラであつたため、夏の陣の折、道明寺の戦いで、伊達正宗隊の銃撃を受けて討ち死した。(享年55歳)





後藤又兵衛の博多人形(ふくおかフィナンシャルグループ1階に展示)

家 紋



山 刀